

ヴェニスの商人

2005(平成17)年11月3日鑑賞(テアトル梅田)



監督・脚本＝マイケル・ラドフォード／原作＝ウィリアム・シェイクスピア／出演＝アル・パチーノ／ジェレミー・アイアンズ／ジョセフ・ファインズ／リン・コリンズ／ズレイカ・ロビンソン／クリス・マーシャル／チャーリー・コックス／ヘザー・ゴールデンハーシュ／アラン・コーデュナー (アートポート、東京テアトル配給／2004年アメリカ・イタリア・ルクセンブルク・イギリス合作映画／130分)

……知っているようで断片的にしか知らないシェイクスピアの名作を2時間あまりで堪能できるから、映画とは実に重宝なもの！ それにしても、16世紀の自由都市ヴェニスにおいてこんなひどいユダヤ人迫害があったとは……。注目の法廷シーンをめぐる坂和評訳は弁護士ならではの斬新な視点がいっぱい！ アル・パチーノらの演技とよく完成されたストーリーを楽しむだけでなく、債務不履行と人肉1ポンドという担保権の実行、そしてあの時代の裁判制度のお勉強も……。



はじめての映画化！

シェイクスピア作品については、『ロミオとジュリエット』が何回か映画化されている。とりわけオリヴィア・ハッセーが出演した1968年のそれは、私が大学生の時、胸をときめかせながら観たことを今でもよく覚えている。また『ハムレット』も映画で何回か観ている。

そしてパンフレットによれば、「イギリス、アメリカ以外の国の中では、シェイクスピアの研究や上演が最も熱心に行われている日本。その中でも『ヴェニスの商人』は舞台の上演回数が最も多い」らしい。しかし、それにもかかわらず、「数本のサイレント作品とTV作品をのぞき、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』が英語圏で映画化されるのは、本作が史上初となる」とのこと。

それは多分、この作品は登場人物が多くて上演時間が長いうえ、セリフの多く

が重要なものであるため、2時間枠の映画にまとめることがしんどいためだろう。この映画ではそれを克服するため(?)に、特に前半にある手法が……。それは、ちょっと不自然で鼻につく感じもあるが、セリフの中でお互いの名前を呼び合うこと……。これによって、お互いの人間関係や背景事情を観客に理解させる作業をスピードアップ……。

1596年に「ゲッター」が……

ナチスドイツによるユダヤ人虐殺を描いた名作に『ライフ・イズ・ビューティフル』(98年)(『シネマルーム1』48頁参照)や『聖なる嘘つき その名はジェイコブ』(99年)(『シネマルーム1』50頁参照)などがあるが、そういう映画を観て私たち日本人が覚えたのが「ゲッター」という言葉。ところがこの『ヴェニス商人』の冒頭でこの「ゲッター」の解説がされたことにビックリ!

パンフレットによれば、「その語源は諸説あるが、ヴェネチア方言で鋳造所を意味する Getto から由来するというのがほぼ定説」とのこと。そして、「小運河に四方を囲まれて孤立した島同然の街並は、ユダヤ人を隔離するのに好都合だったのか、ここがユダヤ人居住区に割り当てられたのは、16世紀初頭」とのこと。さらに、「夜はキリスト教徒が門を施錠して番をし、日中ゲッターを出る者は、ユダヤ人の印として赤い帽子の着用が義務づけられた」というからかなりひどいもの……。

シェイクスピアによって、『ヴェニス商人』が書かれた1596年当時の、世界でもっとも自由な貿易都市ヴェニスにおいて、ユダヤ人がこれほどまでに迫害されていたことをはじめて知ってビックリ。そして、それが理解できなければ、主人公シャイロック(アル・パチーノ)が、なぜこれほどまでに貸金の債務不履行に伴う担保権の実行すなわちアントーニオ(ジェレミー・アイアンズ)の肉1ポンドに固執するのもわからないはず……?

ヴェネチアは今、浸水被害に……

ヴェニス(Venice)は英語読みだが、イタリア語ではヴェネチア(Venezia)で、日本でも水の都として有名。とりわけ有名なのが、サンマルコ広場で、これ

はよくテレビでも取りあげられている美しい広場。『ヴェニスの商人』の舞台はこのヴェネチアだが、ヴェネチアは今、高潮のたびにおきる浸水のため大変な目にあっており、2004年10月には、観光名所サンマルコ広場が冠水し、水に浸かりながら歩く観光客の姿が報道されたほど。そこでこのヴェネチアを浸水から守るため、イタリア首相は水門工事を確約したとのことだが、さてその行方は……？

利息についてのキリスト教の価値観は？

シャイロックの仕事は金融業つまり金貸しだ。19世紀の産業革命を経て、20世紀に入って以降、資本主義は次第に帝国主義へ、そして金融資本主義へと発展していったことは周知の事実。そして現在の社会においては、金融システムが人間の血液の流れと同じように重要であり、金融業＝金貸し業としての銀行が大きな社会的使命を持ち、そして事実上、企業の生殺与奪の権限を握っている……？

考えてみれば、金融＝銀行＝金貸しの根本は、「金を貸して利息を取る」という単純な話。しかしこのように、自ら働かないでパンを得るような行為は、本来キリスト教では禁止されていたものだ。そんな、今の世の中からは想像もつかないような価値観が1596年のヴェネチアでは堂々と（声高に）主張されている。そんな時代状況下において、人に金を貸して利息を取るという卑しい仕事（？）に従事していたのがユダヤ人。こんな事情のため、金貸し業で富を得ているユダヤ人は、キリスト教徒から嫌悪されていたわけだ。

ライブドア、楽天、村上ファンドなど「ファンド」全盛の昨今、何とも隔世の感のある、興味あるお話だ。

芸達者な3人の俳優陣

シェイクスピア劇はセリフが決め手！ そしてそのセリフを芝居の中で観客に伝える役者の力量が決め手！ 日本では映画に比べるとミュージカルや演劇はまだまだ不十分な市場だが、イギリス、アメリカではシェイクスピア劇を演ずる立派な役者が次々と育っており、演劇は映画、ミュージカルと並ぶ三大エンターテインメントとなっている。この映画に登場する3人の男性俳優すなわちシャイロックのアル・パチーノ、アントーニオのジェレミー・アイアンズ、バッサーニオ

のジョセフ・ファインズは、それぞれ舞台を経験したうえで映画に出演している著名な俳優だ。『スターリングラード』(01年)、『キリング・ミー・ソフトリー』(01年)で明らかなジョセフ・ファインズの美形ぶりは際立っているうえ、今年65歳となったアル・パチーノの芸達者ぶりとその存在感は抜群だ！

美貌と財力そして知性のポーシャ！

この映画で大活躍するヒロイン(?)が、ベルモントに住む美しい女相続人のポーシャ(リン・コリンズ)。彼女に求婚する男は、3つの箱から1つを選び、それがうまく当たればオーケーというバカげた趣向だが、時代が時代だけにそんなゲーム(?)も面白いもの……。ところが、1番手のチャレンジャーも、2番手のチャレンジャーも金持ちだが、ヘンなオヤジ……。そして3番目の挑戦者となったのがバッサーニオ。バッサーニオの姿を一目見た時から、何とか正解してほしいと願っていたポーシャだったが、果たしてバッサーニオが選んだ箱は……？

この場面で展開されるバッサーニオのセリフのカッコよさと、2人が結婚式を挙げるシーンでのバッサーニオとポーシャのカッコいいセリフは特筆もの……。そんな幸せの絶頂にあった2人のもとに届いたのが、アントーニオの船の難破という報告だ。ポーシャからお金の援助を受けたバッサーニオは、直ちにヴェニスに戻り、親友アントーニオの裁判に臨んだが……。

生半可ではない男の友情

この映画で注目すべきは、アントーニオとバッサーニオとの男の友情。陽気で遊び好きな若者であるバッサーニオは、モテモテでかなりの自信家……。そのため、ベルモントの女相続人ポーシャが婿探しをしていることを知り、断固自分も立候補。しかしそのためには、先立つものが必要。そこでそれを頼み込んだのがアントーニオというわけだ。

アントーニオは貿易商を営んでおり、財産はタップリ持っているが、現在は積荷を乗せた船があちこちに散らばっているため、手元不如意……。しかし無二の親友バッサーニオに頼まれた以上、何とかそれに応えなければならない。そこ

でやむなく決断したのが、宿敵であるユダヤ人のシャイロックに対する融資の申込み。それほどまでしてバツサーニオのために献身し、さらにシャイロックからの、もし期限内に返済できない時は肉1ポンドをよこせという要求までオーケーしたアントーニオのバツサーニオに対する男の友情とは……？ これは、つくりものの世界といえばそれまでだが、やはり興味深いもの。バツサーニオとアントーニオの年齢はかなり離れているが、ひょっとしてこの2人は同性愛……？

興味深い裁判シーンその1 契約の成立

この映画を観ていて、弁護士として興味深いのは裁判シーンの数々。その第1は、金銭消費貸借と担保契約の成立。シャイロックとアントーニオとの3000ダカットの金銭消費貸借は口頭だけで成立し、文書は交わしていない様子（もっとも、金銭消費貸借契約は今では現金を交付しなければ成立しない「要物契約」とされているが、この時期そこまでの概念はなし……？）。ところが担保については明確に証文を交わしている。シャイロックが、金利を取らないという異例の取り扱いのかわりにアントーニオに要求したのは、アントーニオの肉1ポンドという担保の約束。

近代民法では、担保物権は抵当権・質権・留置権など法定されているが、代物弁済予約などそれ以外の事実上の担保となるような手続もたくさんあり、担保法はそれほど単純ではない。しかし担保法が機能するのは債務不履行となった場合、すなわち、貸し付けたお金が約束の期限どおり返済されない場合のみだ。本件ではその期限は3カ月。しかし返済に絶対的な自信をもっているアントーニオはこれを承諾。ここに、債務不履行の場合はアントーニオの肉1ポンドを提供するという担保契約が成立することに……。

しかし、もちろん近代法ではこんな契約は無効。その理由はいうまでもなく、公序良俗（公の秩序・善良なる風俗）違反（民法90条）ということだが……。

興味深い裁判シーンその2 担保実行の方法は

近代民法では、債務不履行があれば、あらかじめ設定していた担保権の実行は法定の手續に従えばよいことになっている。しかし本件の場合の担保実行の方法

は……？ 各方面に派遣していた船が難破したため、積荷をすべて失い借金の返済ができなくなったアントーニオを救うため、バツサーニオはポーシャの協力を得て、借入金の2倍の金額を準備してこれを返済しようとしたが、シャイロックは期限切れを理由にその受領を拒否し、あくまで担保の実行を要求。そして映画を観る限りでは、この時代のヴェニス法律では、その担保権実行のためには裁判を提起して裁判所によってそれを認めてもらわなければならないよう……？ そのため、シャイロックは断固として訴訟を提起したが……。

興味深い裁判シーンその3 裁判システム

裁判といっても、ヴェニスではそれを裁判官ではなく公爵がやっている。また裁判は公開だが、裁判所という特別な設備があるわけではなく、原告シャイロックと被告アントーニオが並んで立ち、適宜、公爵からの質問に答えるという形で進行する。傍聴席からのヤジ、とりわけ2倍の返済金を持参しているバツサーニオからの抗議や、その友人のグラシアーノ（クリス・マーシャル）からのヤジなども比較的自由だし、この傍聴席からの声に対してシャイロックが反論しても、公爵は別段制限していない。その意味では割とラフでおおらかな裁判システム……？

もっともヴェニスの成文法はかなりしっかりしたものがあるようで、公爵も、借りた金の返済期限を過ぎた以上、担保の約束をしているアントーニオは、その実行をしなければならないと判断していることは明らか。そこで公爵がシャイロックに説得するのは、慈悲の実行ということだが、シャイロックは断固これを拒否。さてそうなると……？

興味深い裁判シーンその4 法学博士の登場

ここで突如登場するのが法学博士。私は最初、これを今の裁判でいう「鑑定人」のようなものと理解していた。つまり、特別の学識経験を有する人から鑑定的な意見を出してもらって、それを裁判所が参考にするという制度だ。ところが映画を観ているとそうではなく、法学博士登場後は、この道の専門家である法学博士に、裁判の進行と判決をすべてまかせるよう。ベラーリオ博士の代わりに登

場した若き法学博士は分厚いヴェニス法の法典を参考に厳格な法解釈を展開していく理論派……？ そのため、次第にシャイロックの主張の正当性が確認されていき、アントーニオもそれを自ら認めることに。そこで遂に、それでは「肉の1ポンドを切り取ることを許す」という判決になり、シャイロックは勝ち誇ったように、ナイフ（包丁？）をアントーニオの胸に近づけていった。

しかしそこで、法学博士が「ちょっと待て、判決は最後まで聞け」と叫んでシャイロックに告げたのが有名なセリフ。すなわち「血は一滴も流してはならぬ」ということと、「肉は正確に1ポンド。それ以上、多くても少なくともならぬ」ということ。そこでたちまち形勢は逆転したうえ、さらにこの若き法学博士は追い打ちをかけるように、ヴェニスの法に従ってユダヤ人に対して厳しい判決を次々と……。さらにこの若き法学博士の言葉は途中からシャイロックと名前を呼ばず、ジュー（ユダヤ人）という呼びかけになるほど、明確な人種差別を含んだものに……。これではユダヤ人のシャイロックがあまりにかわいそう、と私には思えるのだが……。この法学博士は一体ダレ……。それは映画を観てのお楽しみ……。

指輪の絶対性と許される例外は？

恋は女の命。そして結婚式における男からの誓いの言葉と、妻が夫の指にはめる指輪は絶対的なもの……。ポーシャがバツサーニオの指に指輪をはめた時のバツサーニオの誓いは、ポーシャにとってもそしてバツサーニオにとっても絶対的なものだったはず。そしてそれは、バツサーニオとポーシャの結婚式に合わせて挙行されたバツサーニオの友人グラシアーノとポーシャの侍女ネリッサ（ヘザー・ゴールデンハーシュ）との結婚式においても同じだった。

ところが、若き法学博士の名裁きによって、アントーニオの命が助かった後、お礼を受け取らない法学博士が記念として「おねだり」したのは、何とバツサーニオの指にある指輪。これはちょっとまずいと丁重にお断りしようとする、突然法学博士は不機嫌に……。やむなく、バツサーニオは命の恩人に報いるため、その指輪を法学博士に与えることに。そしてグラシアーノも同じように、法学博士の助手に対してネリッサからの指輪を……。

さてそうになると、ポーシャの元へ帰ってきてから、指輪のことを追及されたバツサーニオとグラシアーノの2人の立場や如何……？ シェイクスピア劇の面白さを味わうことができる、この指輪にまつわるお話をたっぷりと楽しもう。

父娘の断絶とその行方は？

この映画にはシャイロックの娘ジェシカが登場するが、ジェシカ（ズレイカ・ロビンソン）はキリスト教徒でバツサーニオやグラシアーノの仲間であるロレンゾー（チャーリー・コックス）にぞっこん……。なぜ、どういうきっかけでそうなったのかは映画の中では明らかではないが、どうもジェシカからの一方的な一目ぼれのように……？

この2人が駆け落ちする場面は、有名な『ロミオとジュリエット』のバルコニーのシーンを彷彿させるものだが、この映画ではキリスト教徒とユダヤ教徒の2人の恋愛や駆け落ち、そしてその後の生活については、あまり重点をおいておらず、サラリと描いているだけ……。

しかしそうであるため、余計に娘とお金を一方的に奪われたシャイロックの悲しみや嘆きはより大きく、印象的なものに。そのため、この父娘の断絶はどうしようもないものと思われたが、裁判ですべてを失った父親に対して娘が示すやさしい目は……？

久しぶりの満席に満足……

この『ヴェニス商人』は約100席ある映画館での上映だが、約30分前に行ってチケットを買うと、既に順番待ちで50番目。これは満席になりそうだと思うと、そのとおりの満席に。もちろん年配者が多いが満席は久しぶりで、こんないい映画を選んで多くの観客が集まっていることになぜか満足……。

なお上映終了後、次回の上映を待つ観客がいっぱいだったことも、合わせて報告しておこう。

2005(平成17)年11月5日記